

表10 補導・逮捕歴の有無

主たる使用薬物	(性)	薬物乱用前あり	薬物乱用開始後あり	これまでなし	不明	計
覚せい剤	(男)	88 (24.5%)	209 (58.2%)	54 (15.0%)	36 (10.0%)	359 (100.0%)
	(女)	20 (16.3%)	63 (51.2%)	34 (27.6%)	15 (12.2%)	123 (100.0%)
有機溶剤	(男)	20 (14.7%)	72 (52.9%)	30 (22.1%)	19 (14.0%)	136 (100.0%)
	(女)	3 (10.7%)	14 (50.0%)	6 (21.4%)	6 (21.4%)	28 (100.0%)
睡眠薬	(男)	2 (6.7%)	7 (23.3%)	15 (50.0%)	6 (20.0%)	30 (100.0%)
	(女)	2 (6.9%)	3 (10.3%)	19 (65.5%)	5 (17.2%)	29 (100.0%)
抗不安薬	(男)	1 (11.1%)	1 (11.1%)	4 (44.4%)	3 (33.3%)	9 (100.0%)
	(女)	1 (12.5%)	1 (12.5%)	5 (62.5%)	2 (25.0%)	8 (100.0%)
鎮痛薬	(男)			7 (58.3%)	5 (41.7%)	12 (100.0%)
	(女)		2 (16.7%)	8 (66.7%)	2 (16.7%)	12 (100.0%)
鎮咳薬	(男)	4 (17.4%)	7 (30.4%)	12 (52.2%)	3 (13.0%)	23 (100.0%)
	(女)	1 (12.5%)	3 (37.5%)	5 (62.5%)		8 (100.0%)
大麻	(男)	2 (8.7%)	5 (21.7%)	16 (69.6%)	1 (4.3%)	23 (100.0%)
	(女)					0 (100.0%)
その他	(男)		2 (16.7%)	8 (66.7%)	2 (16.7%)	12 (100.0%)
	(女)			1 (33.3%)	2 (66.7%)	3 (100.0%)
多剤 (医薬品)	(男)	2 (11.1%)	3 (16.7%)	9 (50.0%)	4 (22.2%)	18 (100.0%)
	(女)			6 (75.0%)	2 (25.0%)	8 (100.0%)
多剤 (規制薬物)	(男)	9 (34.6%)	10 (38.5%)	4 (15.4%)	5 (19.2%)	26 (100.0%)
	(女)	4 (44.4%)	4 (44.4%)	2 (22.2%)	1 (11.1%)	9 (100.0%)
計	(男)	128 (19.8%)	316 (48.8%)	159 (24.5%)	84 (13.0%)	648 (100.0%)
	(女)	31 (13.6%)	90 (39.5%)	86 (37.7%)	35 (15.4%)	228 (100.0%)
男女計		159 (18.2%)	406 (46.3%)	245 (28.0%)	119 (13.6%)	876 (100.0%)

(複数選択)

”の割合について乱用開始前・後の比を算出すると、4～15倍程度に増加していた。

6) 暴力団との関係 (表6)

全体の42.2%は“これまで関係なし”であったが、23.9%は“薬物乱用前”に、5.7%は“現在もあり”であった。“乱用前にあり”は『覚せい剤症例』では1/3と高く、男性の割合が高かった。調査時点においては、暴力団との関係を依然として有する症例の割合は、全体の5.7%と低下していたが、『覚せい剤症例』、『多剤症例(規制薬物)』では高く、『覚せい剤症例』では女性の10.6%にみられ、男性の割合を上回っていた。

7) 非行グループとの関係 (表7)

薬物乱用前には、症例全体の1/3が非行グループとの関係を有していた。とくに『多剤症例(規制薬物)』では男女合わせて57.1%と高かった。『有機溶剤症例』においても男性で35.3%、女性で46.4%と高い割合を示し、『覚せい剤症例』も約1/3と高い割合を示した。

乱用開始後では、非行グループとの関係が継続

している症例は全体の4.1%と減少したが、上記の症例群および『大麻症例』では13.0%と高かった。また多くの症例群で、乱用開始前に関係を有する割合において、女性が男性を上回っていた。

8) 薬物乱用者との関係 (表8)

薬物乱用開始前に、全体の約40%の症例がすでに他の薬物乱用者との関係があり、とくに『多剤症例(規制薬物)』、『覚せい剤症例』、『有機溶剤症例』で40～60%前後と高く、『鎮咳薬症例』が9例(29%)とこれに次いでいた。乱用者との関係を有する割合は、薬物乱用開始後には全体として約30%となるが、『覚せい剤症例』の女性では依然として40%以上であった。ここでも全般的に女性において“他の乱用者との関係を有する割合”の方が、男性のそれを上回っていることが多かった。

9) 矯正施設への入所歴 (表9)

これまでに矯正施設への入所歴を有する割合は、全体の31.6%にみられ、男性症例全体の36.7%、女性症例全体の17.1%であった。主たる薬物別では、『多剤症例(規制薬物)』の男性、『覚せい剤

表11 配偶関係

	未婚	同棲	内縁	既婚	別居	離婚	死別	再婚	その他	不明	計
覚せい剤	(男) 204 (56.8%)	5 (1.4%)	7 (1.9%)	49 (13.6%)	3 (0.8%)	74 (20.6%)	2 (0.6%)	3 (0.8%)	0	12 (3.3%)	359
	(女) 56 (45.5%)	7 (5.7%)	3 (2.4%)	16 (13.0%)	0	32 (26.0%)	1 (0.8%)	4 (3.3%)	0	4 (3.3%)	123
有機溶剤	(男) 108 (79.4%)	1 (0.7%)	0	8 (5.9%)	0	14 (10.3%)	0	0	1 (0.7%)	4 (2.9%)	136
	(女) 17 (60.7%)	0	0	2 (7.1%)	0	8 (28.6%)	1 (3.6%)	0	0	0	28
睡眠薬	(男) 15 (50.0%)	2 (6.7%)	2 (6.7%)	6 (20.0%)	0	5 (16.7%)	0	0	0	0	30
	(女) 5 (17.2%)	0	2 (6.9%)	9 (31.0%)	0	10 (34.5%)	1 (3.4%)	1 (3.4%)	0	1 (3.4%)	29
抗不安薬	(男) 7 (77.8%)	0	0	1 (11.1%)	0	1 (11.1%)	0	0	0	0	9
	(女) 3 (37.5%)	0	0	2 (25.0%)	0	3 (37.5%)	0	0	0	0	8
鎮痛薬	(男) 5 (41.7%)	0	0	4 (33.3%)	0	3 (25.0%)	0	0	0	0	12
	(女) 2 (16.7%)	0	1 (8.3%)	4 (33.3%)	1 (8.3%)	4 (33.3%)	0	0	0	0	12
鎮咳薬	(男) 17 (73.9%)	0	0	3 (13.0%)	0	3 (13.0%)	0	0	0	0	23
	(女) 2 (25.0%)	2 (25.0%)	0	3 (37.5%)	0	1 (12.5%)	0	0	0	0	8
大麻	(男) 23 (100.0%)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23
	(女) 0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	(男) 7 (58.3%)	1 (8.3%)	0	3 (25.0%)	0	1 (8.3%)	0	0	0	0	12
	(女) 1 (33.3%)	0	0	2 (66.7%)	0	0	0	0	0	0	3
多剤 (医薬品)	(男) 9 (50.0%)	0	1 (5.6%)	4 (22.2%)	0	3 (16.7%)	1 (5.6%)	0	0	0	18
	(女) 2 (25.0%)	1 (12.5%)	0	3 (37.5%)	0	1 (12.5%)	1 (12.5%)	0	0	0	8
多剤 (規制薬物)	(男) 15 (57.7%)	1 (3.8%)	1 (3.8%)	2 (7.7%)	0	5 (19.2%)	0	0	2 (7.7%)	0	26
	(女) 4 (44.4%)	1 (11.1%)	1 (11.1%)	1 (11.1%)	0	2 (22.2%)	0	0	0	0	9
計	(男) 410 (63.3%)	10 (1.5%)	11 (1.7%)	80 (12.3%)	3 (0.5%)	109 (16.8%)	3 (0.5%)	3 (0.5%)	3 (0.5%)	16 (2.5%)	648
	(女) 92 (40.4%)	11 (4.8%)	7 (3.1%)	42 (18.4%)	1 (0.4%)	61 (26.8%)	4 (1.8%)	5 (2.2%)	0 (0.0%)	5 (2.2%)	228
男女計	502 (57.3%)	21 (2.4%)	18 (2.1%)	122 (14.7%)	4 (0.5%)	170 (19.4%)	7 (0.8%)	8 (0.9%)	3 (0.3%)	21 (2.4%)	876

表12-1 主たる使用薬物別にみた薬物初回使用年齢

主たる使用薬物 (使用薬物)	覚せい剤 (覚せい剤)		有機溶剤 (有機溶剤)		睡眠薬 (睡眠薬)	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
年齢(歳)						
10~14	3 (0.8%)	9 (7.3%)	50 (36.8%)	11 (39.3%)		1 (3.4%)
15~19	94 (26.2%)	61 (49.6%)	75 (55.1%)	13 (46.4%)	2 (6.7%)	2 (6.9%)
20~24	126 (35.1%)	22 (17.9%)	3 (2.2%)	1 (3.6%)	6 (20.0%)	8 (27.6%)
25~29	67 (18.7%)	13 (10.6%)	2 (1.5%)			7 (24.1%)
30~34	27 (7.5%)	5 (4.1%)	3 (2.2%)		4 (13.3%)	1 (3.4%)
35~39	8 (2.2%)	1 (0.8%)			4 (13.3%)	3 (10.3%)
40~44	3 (0.8%)	2 (1.6%)			1 (3.3%)	1 (3.4%)
45~49	2 (0.6%)				1 (3.3%)	1 (3.4%)
50~54	2 (0.6%)	1 (0.8%)				1 (3.4%)
55~59					2 (6.7%)	
60~64					1 (3.3%)	
65~						
不明	27 (7.5%)	9 (7.3%)	3 (2.2%)	3 (10.7%)	9 (30.0%)	4 (13.8%)
計	359 (100.0%)	123 (100.0%)	136 (100.0%)	28 (100.0%)	30 (100.0%)	29 (100.0%)
平均年齢(男女別)	22.9±6.1	20.3±6.3	15.8±3.2	15.0±2.0	32.9±13.2	27.6±9.9
平均年齢(全体)	22.3±6.2		15.7±3.1		30.0±11.7	

表12-2 主たる使用薬物別にみた薬物初回使用年齢

主たる使用薬物 (使用薬物)	抗不安薬 (抗不安薬)		鎮痛薬 (鎮痛薬)		鎮咳薬 (鎮咳薬)	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
年齢(歳)						
10~14						
15~19	1 (11.1%)	1 (12.5%)	2 (16.7%)	1 (8.3%)	6 (26.1%)	2 (25.0%)
20~24	2 (22.2%)	2 (25.0%)		4 (33.3%)	9 (39.1%)	5 (62.5%)
25~29	4 (44.4%)	2 (25.0%)	1 (8.3%)		3 (13.0%)	1 (12.5%)
30~34	1 (11.1%)	1 (12.5%)		2 (16.7%)	2 (8.7%)	
35~39			1 (8.3%)			
40~44			1 (8.3%)	1 (8.3%)		
45~49			1 (8.3%)	2 (16.7%)		
50~54				1 (8.3%)		
55~59						
60~64			1 (8.3%)			
65~						
不明	1 (11.1%)	2 (25.0%)	5 (41.7%)	1 (8.3%)	3 (13.0%)	
計	9 (100.0%)	8 (100.0%)	12 (100.0%)	12 (100.0%)	23 (100.0%)	8 (100.0%)
平均年齢(男女別)	24.6±4.7	24.0±4.2	35.3±15.8	32.0±13.2	21.8±4.6	21.4±2.8
平均年齢(全体)	24.4±4.3		33.3±13.9		21.6±4.1	

表12-3 主たる使用薬物別にみた薬物初回使用年齢

主たる使用薬物 (使用薬物)	大麻 (大麻)		その他 (その他)	
	男性	女性	男性	女性
年齢(歳)				
10~14	1 (4.2%)			
15~19	13 (54.2%)			
20~24	6 (25.0%)		3 (25.0%)	2 (66.7%)
25~29	1 (4.2%)		3 (25.0%)	
30~34	1 (4.2%)		2 (16.7%)	1 (33.3%)
35~39			2 (16.7%)	
40~44				
45~49			1 (8.3%)	
50~54				
55~59				
60~64				
65~				
不明	2 (8.3%)		1 (8.3%)	
計	24 (100.0%)	0	12 (100.0%)	3 (100.0%)
平均年齢(男女別)	19.1±4.6	-	30.0±7.7	25.7±4.7
平均年齢(全体)	19.1±4.6		29.1±7.2	

表12-4 主たる使用薬物別にみた薬物初回使用年齢

主たる使用薬物 (使用薬物)	多剤(医薬品)			
	(睡眠薬)		(抗不安薬)	
年齢(歳)	男性	女性	男性	女性
10~14				
15~19	1 (6.7%)		1 (6.7%)	1 (14.3%)
20~24	3 (20.0%)		3 (20.0%)	
25~29	3 (20.0%)	4 (50.0%)	3 (20.0%)	3 (42.9%)
30~34	3 (20.0%)	1 (12.5%)	4 (26.7%)	1 (14.3%)
35~39	1 (6.7%)	1 (12.5%)	1 (6.7%)	1 (14.3%)
40~44				
45~49	1 (6.7%)		1 (6.7%)	
50~54				
55~59	1 (6.7%)			
60~64				
65~				
不明	2 (13.3%)	2 (25.0%)	2 (13.3%)	1 (14.3%)
計	15 (100.0%)	8 (100.0%)	15 (100.0%)	7 (100.0%)
平均年齢(男女別)	30.2±10.7	29.0±4.3	28.7±7.9	27.7±6.3
平均年齢(全体)	29.8±9.1		28.3±7.1	

表12-5 主たる使用薬物別にみた薬物初回使用年齢

主たる使用薬物 (使用薬物)	多剤(規制薬物)					
	(覚せい剤)		(有機溶剤)		(大麻)	
年齢(歳)	男性	女性	男性	女性	男性	女性
<10	1 (4.3%)					
10~14	1 (4.3%)		8 (30.8%)	1 (20.0%)	1 (12.5%)	
15~19	6 (26.1%)	3 (37.5%)	10 (38.5%)	4 (80.0%)	3 (37.5%)	2 (33.3%)
20~24	9 (39.1%)	2 (25.0%)	2 (7.7%)		4 (50.0%)	3 (50.0%)
25~29	1 (4.3%)	1 (12.5%)				
30~34						
35~39	1 (4.3%)					
40~44						
45~49						
50~54						
55~59						
60~64						
65~						
不明	4 (17.4%)	2 (25.0%)	6 (23.1%)			1 (16.7%)
計	23 (95.7%)	8 (100.0%)	26 (100.0%)	5 (100.0%)	8 (100.0%)	6 (100.0%)
平均年齢(男女別)	20.2±5.6	20.5±3.7	15.7±2.7	14.2±2.4	19.3±3.4	19.6±1.7
平均年齢(全体)	20.8±5.7		15.2±2.6		19.4±2.8	

症例』の男性で高い割合であった。

1 0) 逮捕・補導歴の有無 (表 1 0)

全体の28%はこれまでに逮捕・補導歴を有していないが、薬物乱用開始前に18.2%、開始後では46.3%と半数近くが逮捕・補導歴を有していた。『覚せい剤症例』、『有機溶剤症例』において割合が高く、『多剤症例 (規制薬物)』、『鎮咳薬症例』がこれに次いでいた。

1 1) 配偶関係 (表 1 1)

各症例群の年齢分布の違いを考慮に入れなければならないが、全体的には60%近くが未婚で、『有機溶剤症例』、『多剤症例 (規制薬物)』、『覚せい剤症例』で高い割合を示した。既婚者の割合は『医薬品症例』、『鎮痛薬症例』、『多剤症例 (医薬品)』で20~35%前後と比較的高かった。離婚率は『覚せい剤症例』、『有機溶剤症例』、『睡眠薬症例』、『鎮痛薬症例』で比較的高く、いずれも女性の方が高い傾向がみられた。

1 2) 主たる使用薬物の初回使用年齢

(表 1 2-1~5)

“主たる使用薬物”別の初回薬物使用の平均年齢をみると、『有機溶剤症例』が15.7歳と最も低年齢で薬物乱用を開始していた。次いで、『大麻症例』19.1歳、『鎮咳薬症例』21.6歳、『覚せい剤症例』22.3歳であった。

医薬品では、薬物使用開始年齢はより高く、『睡眠薬症例』30.0歳、『鎮痛薬症例』33.3歳などであった。『多剤症例 (規制薬物)』における覚せい剤、有機溶剤の初回使用年齢は、『覚せい剤症例』、『有機溶剤症例』におけるそれぞれの初回使用年齢よりも低い傾向がみられた。

規制薬物、医薬品を問わずほぼすべての薬物において、女性の方がより低年齢で薬物使用を開始している傾向が見られた。なお、睡眠薬や抗不安薬などの処方薬においては、原疾患の治療を目的として使用を開始した年齢が含まれている可能性があり、これらがすべて「乱用」の開始年齢とはいえないことに注意する必要がある。

1 3) 主たる使用薬物の使用期間 (表 1 3)

薬物の使用期間の算出は従来と同様で、①最近1年間に薬物使用歴を有する場合は「調査時年齢

—初回使用年齢」、②最近1年以内に薬物使用歴がない場合は「最終使用年齢—初回使用年齢」とし、各薬物症例群において“主たる薬物”のみについて求めた。したがってここでの「使用期間」とは、あくまで薬物使用の“始め”と“終わり (あるいは現在)”のみから算出されたものであり、使用期間中の薬物使用様態の変化 (使用中断後の再開、使用量の増減等)などは全く反映していない。

全体的な平均使用期間は、『大麻症例』の4.7年から『鎮痛薬症例』の14.1年と長期に及んでいた。概ね、「5~10年未満」あるいは「10~15年未満」に比較的多く分布していた。5年以上の使用期間は全体で383例 (43.7%)、10年以上は256例 (29.%)にみられた。

1 4) 併用薬物と初回使用年齢

(表 1 4-1, 1 4-2)

主たる使用薬物別に、併用薬物 (これまでに使用歴のある薬物) について、それぞれ使用頻度と平均使用開始年齢を示した。

『覚せい剤症例』では、覚せい剤の単独使用症例は全体の45.2%で、最も頻度の高い併用薬物は有機溶剤 (43.6%) で、大麻 (24.9%) がこれに次いでいた。有機溶剤使用開始年齢は、『有機溶剤症例』におけるそれよりも、わずかであるが低かった。『有機溶剤症例』においては、単独使用症例は66.5%と最も高く、覚せい剤、大麻の使用歴を有する割合がそれぞれ21.3%、14.0%であった。覚せい剤使用開始年齢は、『覚せい剤症例』よりやや低かった。『大麻症例』では、単独使用症例は43.5%で、使用歴を有する薬物としては、有機溶剤、覚せい剤の割合が高かった。

『多剤症例 (規制薬物)』では、覚せい剤、有機溶剤の併用例が80~90%と大部分を占め、40.0%は大麻を併用していた。コカインの使用率は、『大麻症例』、『多剤症例 (規制薬物)』、『覚せい剤症例』で比較的高かった。『多剤症例 (規制薬物)』の11.4%はヘロイン使用歴も有していた。これらの多くは20歳前後に使用が開始されていた。

処方薬・医薬品使用の症例では、『鎮痛薬症例』、『鎮咳薬症例』で単独使用症例の割合が高く、50%台であった。『睡眠薬症例』、『抗不安薬症例』では単独使用率は低く、『多剤症例 (医薬品)』の80~90%が睡眠薬、抗不安薬を併用していた。『睡眠薬症例』および『多剤症例 (医薬品)』では、20%

表13 主たる薬物別にみた薬物使用期間

使用期間(年)	主たる使用薬物							
	覚せい剤	有機溶剤	睡眠薬	抗不安薬	鎮痛薬	鎮咳薬	大麻	その他
平均	10.0±8.5	11.4±8.0	8.0±7.7	9.9±8.4	14.1±13.4	7.9±5.1	4.7±5.7	1.0
<1	23 (4.8%)	7 (4.3%)	0	1 (5.9%)	1 (4.2%)	0	2 (8.7%)	0
1~2	20 (4.1%)	7 (4.3%)	4 (6.8%)	1 (5.9%)	0	2 (6.5%)	8 (34.8%)	1 (6.7%)
2~3	24 (5.0%)	6 (3.7%)	4 (6.8%)	1 (5.9%)	0	2 (6.5%)	0	0
3~4	20 (4.1%)	9 (5.5%)	4 (6.8%)	0	1 (4.2%)	1 (3.2%)	3 (13.0%)	0
4~5	30 (6.2%)	3 (1.8%)	5 (8.5%)	2 (11.8%)	1 (4.2%)	1 (3.2%)	2 (8.7%)	0
5~10	79 (16.4%)	23 (14.0%)	9 (15.3%)	1 (5.9%)	3 (12.5%)	10 (32.3%)	2 (8.7%)	0
10~15	53 (11.0%)	22 (13.4%)	10 (16.9%)	1 (5.9%)	3 (12.5%)	5 (16.1%)	2 (8.7%)	0
15~20	44 (9.1%)	29 (17.7%)	3 (5.1%)	4 (23.5%)	1 (4.2%)	3 (9.7%)	2 (8.7%)	0
20~25	23 (4.8%)	9 (5.5%)	1 (1.7%)	0	1 (4.2%)	0	0	0
25~30	14 (2.9%)	6 (3.7%)	1 (1.7%)	1 (5.9%)	0	0	0	0
30~35	10 (2.1%)	2 (1.2%)	0	0	0	0	0	0
35≤	3 (0.6%)	0	1 (1.7%)	0	2 (8.3%)	0	0	0
不明	139 (28.8%)	41 (25.0%)	17 (28.8%)	5 (29.4%)	11 (45.8%)	7 (22.6%)	2 (8.7%)	14 (93.3%)
計	482 (100.0%)	164 (100.0%)	59 (100.0%)	17 (100.0%)	24 (100.0%)	31 (100.0%)	23 (100.0%)	15 (100.0%)

表14-1 主たる使用薬物別にみた併用薬物と使用開始年齢

(併用薬物)	主たる使用薬物				
	覚せい剤	有機溶剤	大麻	コカイン	多剤(規制薬物)
なし	218 (45.2%)	109 (66.5%)	10 (43.5%)	0	0
覚せい剤	482 (100.0%) 22.3±6.2	35 (21.3%) 21.1±5.4	7 (30.4%) 19.1±1.2	1 (100.0%) 31	32 (91.4%) 20.8±5.7
有機溶剤	210 (43.6%) 15.3±2.0	164 (100.0%) 15.7±3.1	10 (43.5%) 17.2±3.8	0	29 (82.9%) 15.2±2.6
睡眠薬	49 (10.2%) 22.9±7.4	14 (8.5%) 20.9±6.3	2 (8.7%) 23.0±1.4	0	11 (31.4%) 24.2±7.7
抗不安薬	23 (4.8%) 24.7±8.7	6 (3.7%) 7.98.7	0 (0.0%)	0	6 (17.1%) 22.0±5.8
鎮痛薬	17 (3.5%) 27.4±11.3	8 (4.9%) 19.3±6.1	0 (0.0%)	0	8 (22.9%) 18.0±5.8
鎮咳薬	15 (3.1%) 20.9±5.0	5 (3.0%) 17.6±2.9	0 (0.0%)	0	3 (8.6%) 15
大麻	120 (24.9%) 20.5±5.1	23 (14.0%) 19.8±4.8	23 (100.0%) 19.1±4.5	0	14 (40.0%) 19.4±2.8
コカイン	41 (8.5%) 22.4±5.4	3 (1.8%) 18.0±3.0	4 (17.4%) 23.7±9.9	1 (100.0%) 25	5 (14.3%) 23.2±2.2
ヘロイン	12 (2.5%) 21.0±4.2	3 (1.8%) 21.7±4.0	1 (4.3%) 17	0	4 (11.4%) 19.8±5.0
その他	41 (8.5%) 21.9±7.5	6 (3.7%) 19.8±4.3	6 (26.1%) 20.3±4.9	0	8 (22.9%) 25.0±5.9

(複数回答)

表14-2 主たる使用薬物別にみた併用薬物と使用開始年齢

(併用薬物)	主たる使用薬物					
	睡眠薬	抗不安薬	鎮痛薬	鎮咳薬	その他	多剤(医薬品)
なし	19 (32.2%) 22.7±9.0	8 (47.1%) -	14 (58.3%) 31.5±19.1	16 (51.6%) 18.8±2.8	5 (33.3%) 26.0±5.2	0 24.3±5.9
覚せい剤	13 (22.0%) 22.7±9.0	1 (5.9%) -	2 (8.3%) 31.5±19.1	4 (12.9%) 18.8±2.8	4 (26.7%) 26.0±5.2	5 (19.2%) 24.3±5.9
有機溶剤	11 (18.6%) 16.1±2.2	1 (5.9%) 18	1 (4.2%) 16	10 (32.3%) 16.3±3.2	1 (6.7%) 15	4 (15.4%) 15.5±3.5
睡眠薬	59 (100.0%) 30.0±11.7	7 (41.2%) 22.8±4.4	5 (20.8%) 33.6±17.3	6 (19.4%) 24.7±6.1	4 (26.7%) 48.3±35.4	22 (84.6%) 29.8±9.1
抗不安薬	27 (45.8%) 28.3±9.8	17 (100.0%) 24.4±4.3	5 (20.8%) 32.6±15.4	4 (12.9%) 24.7±6.1	5 (33.3%) 26.6±3.4	23 (88.5%) 28.3±7.1
鎮痛薬	10 (16.9%) 24.0±8.6	3 (17.6%) 20.3±0.6	24 (100.0%) 33.3±13.9	3 (9.7%) 18.7±10.0	0	9 (34.6%) 29.4±12.3
鎮咳薬	5 (8.5%) 18.3±2.4	1 (5.9%) 18	2 (8.3%) 23.5±10.6	31 (100.0%) 21.6±4.1	1 (6.7%) 22	4 (15.4%) 26.0±6.9
大麻	6 (10.2%) 19.5±3.7	0	2 (8.3%) 18	3 (9.7%) 18	0	2 (7.7%) 21.0±1.4
コカイン	4 (6.8%) 20.8±2.3	0	0	1 (3.2%) -	2 (13.3%) 29.0±5.7	0
ヘロイン	3 (5.1%) 20.7±2.3	0	0	0	1 (6.7%) 22	0
その他	7 (11.9%) 22.6±5.3	1 (5.9%) -	2 (8.3%) 49.5±0.7	0	12 (80.0%) 30.0±7.4	2 (7.7%) 24.0±7.1

(複数回答)

前後に覚せい剤使用歴がみられた。『鎮咳薬症例』における覚せい剤使用頻度は12.9%と特に高いとはいえないが、使用開始年齢は18.8歳と低く、覚せい剤初回使用年齢としては、すべての薬物群の中で最も低年齢であった。また、有機溶剤の使用頻度も32.3%と高かった。

15) 過去1年間における薬物使用歴 (表15-1, 15-2)

『覚せい剤症例』においては過去1年間に覚せい剤使用歴を有する症例の割合は約1/3で、『有機溶剤症例』では半数に有機溶剤の使用歴がみられた。『大麻症例』では、3/4に1年以内の大麻使用歴がみられた。

『医薬品症例』では、過去1年間にそれぞれの主たる使用薬物の使用歴を有する割合が概して高く、睡眠薬、抗不安薬では80%を超えており、次いで鎮咳薬、鎮痛薬では60%前後であった。『多剤症例(医薬品)』では、60%前後が1年以内

に睡眠薬および抗不安薬の使用歴がみられた。

16) 喫煙の状況(表16)

症例全体としては約半数が現在喫煙者で、喫煙開始年齢は平均15.7歳であった。『有機溶剤症例』では14.6歳と最も低年齢で喫煙を開始しており、『多剤症例(規制薬物)』が14.7歳とほぼ同年齢であった。非喫煙者の割合は、『鎮痛薬症例』、『その他症例』、『鎮咳薬症例』などで比較的高かったが、全体としては4.7%と低かった。『大麻症例』では喫煙者の割合が87.0%と最も高かった。全般的に『規制薬物症例』で喫煙頻度が高く、より低年齢で喫煙を開始している傾向がみられた。

17) 飲酒状況(表17)

症例全体として半数近くが現在飲酒者で、飲酒開始年齢は平均16.7歳であった。『大麻症例』で15.3歳と最も低年齢で、『有機溶剤症例』が15.6歳とこれに次いでいた。飲酒者の割合は、『大麻症

表15-1 主たる使用薬物別にみた過去1年間における使用薬物

(使用薬物)	主たる使用薬物			
	覚せい剤	有機溶剤	大麻	多剤(規制薬物)
覚せい剤	174 (36.1%)	7 (4.3%)	0 (0.0%)	9 (25.7%)
有機溶剤	4 (0.8%)	83 (50.6%)	2 (8.7%)	8 (22.9%)
睡眠薬	21 (4.4%)	8 (4.9%)	1 (4.3%)	7 (20.0%)
抗不安薬	11 (2.3%)	6 (3.7%)	0 (0.0%)	4 (11.4%)
鎮痛薬	5 (1.0%)	3 (1.8%)	0 (0.0%)	3 (8.6%)
鎮咳薬	1 (0.2%)	2 (1.2%)	0 (0.0%)	1 (2.9%)
大麻	12 (2.5%)	1 (0.6%)	17 (73.9%)	4 (11.4%)
コカイン	2 (0.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
ヘロイン	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
その他	11 (2.3%)	0 (0.0%)	4 (17.4%)	1 (2.9%)
総症例数	482 (100.0%)	164 (100.0%)	23 (100.0%)	35 (100.0%)

(複数回答)

表15-2 主たる使用薬物別にみた過去1年間における使用薬物

(使用薬物)	主たる使用薬物					
	睡眠薬	抗不安薬	鎮痛薬	鎮咳薬	その他	多剤(医薬品)
覚せい剤	1 (1.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (3.8%)
有機溶剤	0	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (6.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
睡眠薬	52 (88.1%)	7 (41.2%)	4 (16.7%)	4 (12.9%)	4 (26.7%)	14 (53.8%)
抗不安薬	19 (32.2%)	14 (82.4%)	3 (12.5%)	4 (12.9%)	5 (33.3%)	17 (65.4%)
鎮痛薬	6 (10.2%)	3 (17.6%)	14 (58.3%)	2 (6.5%)	0 (0.0%)	5 (19.2%)
鎮咳薬	0	1 (5.9%)	1 (4.2%)	20 (64.5%)	1 (6.7%)	2 (7.7%)
大麻	1 (1.7%)	0 (0.0%)	1 (4.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
コカイン	0	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (6.7%)	0 (0.0%)
ヘロイン	0	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
その他	5 (8.5%)	1 (5.9%)	1 (4.2%)	0 (0.0%)	12 (80.0%)	1 (3.8%)
総症例数	59 (100.0%)	17 (100.0%)	24 (100.0%)	31 (100.0%)	15 (100.0%)	26 (100.0%)

(複数回答)

表16 主たる薬物別にみた喫煙状況

	普段の喫煙状況				平均年齢
	喫煙せず	喫煙中	不明	計	
覚せい剤	11 (2.3%)	269 (55.8%)	202 (41.9%)	482 (100.0%)	15.7±2.8
有機溶剤	6 (3.7%)	86 (52.4%)	72 (43.9%)	164 (100.0%)	14.6±2.4
睡眠薬	7 (11.9%)	23 (39.0%)	29 (49.2%)	59 (100.0%)	16.8±3.4
抗不安薬	0 (0.0%)	7 (41.2%)	10 (58.8%)	17 (100.0%)	18.4±2.3
鎮痛薬	6 (25.0%)	5 (20.8%)	13 (54.2%)	24 (100.0%)	15.4±2.2
鎮咳薬	4 (12.9%)	18 (58.1%)	9 (29.0%)	31 (100.0%)	17.4±4.6
大麻	0 (0.0%)	20 (87.0%)	3 (13.0%)	23 (100.0%)	15.4±1.5
その他	3 (20.0%)	8 (53.3%)	4 (26.7%)	15 (100.0%)	18.3±1.5
多剤(医薬品)	3 (11.5%)	9 (34.6%)	14 (53.8%)	26 (100.0%)	17.3±5.4
多剤(規制薬物)	1 (2.9%)	19 (54.3%)	15 (42.9%)	35 (100.0%)	14.7±4.5
計	41 (4.7%)	464 (53.0%)	371 (42.4%)	876 (100.0%)	15.7±3.0

表17 主たる使用薬物別にみた飲酒状況

	普段の飲酒状況			計	飲酒開始平均年齢
	飲酒せず	飲酒	不明		
覚せい剤	67 (13.9%)	237 (49.2%)	178 (36.9%)	482 (100.0%)	16.9±2.9
有機溶剤	38 (23.2%)	65 (39.6%)	61 (37.2%)	164 (100.0%)	15.6±2.5
睡眠薬	13 (22.0%)	25 (42.4%)	21 (35.6%)	59 (100.0%)	17.2±3.3
抗不安薬	2 (11.8%)	8 (47.1%)	7 (41.2%)	17 (100.0%)	19.3±2.3
鎮痛薬	8 (33.3%)	7 (29.2%)	9 (37.5%)	24 (100.0%)	21.6±10.8
鎮咳薬	11 (35.5%)	14 (45.2%)	6 (19.4%)	31 (100.0%)	17.0±3.7
大麻	2 (8.7%)	19 (82.6%)	2 (8.7%)	23 (100.0%)	15.3±1.7
その他	5 (33.3%)	5 (33.3%)	5 (33.3%)	15 (100.0%)	17.6±2.3
多剤 (医薬品)	2 (7.7%)	11 (42.3%)	13 (50.0%)	26 (100.0%)	16.1±4.5
多剤 (規制薬物)	4 (11.4%)	17 (48.6%)	14 (40.0%)	35 (100.0%)	16.5±3.0
計	152 (17.4%)	408 (46.6%)	316 (36.1%)	876 (100.0%)	16.7±3.3

例』で82.6%と最も高かった。一方、非飲酒者は『鎮痛薬症例』、『鎮咳薬症例』で約1/3と比較的高かった。

18) 治療開始年齢 (表18)

薬物関連精神疾患に関する精神科治療の開始年齢について表18に示した。

『大麻症例』、『有機溶剤症例』が22歳前後と最も低年齢で治療が開始されていた。これに対して『鎮痛薬症例』、『睡眠薬症例』では30歳代後半以降と高かった。年代別では、『有機溶剤症例』は約1/3の症例において、20歳未満で治療が開始されていた。『大麻症例』では半数が15～19歳で治療が始まっていた。

なお、『睡眠薬症例』、『抗不安薬症例』等の処方薬を主たる使用薬物とする症例群では、睡眠障害や神経症といった薬物投与の契機となった原疾患の治療開始年齢が含まれている可能性も否定できず、薬物関連精神疾患の治療開始とは必ずしも一致しない場合がある。

19) 入院形態 (表19)

調査時点において入院治療を受けている患者について、入院時の入院形態を主たる使用薬物別にみたものである。入院患者総数は505例で、症例全体の57.6%を占めていた。主たる使用薬物別では、『多剤症例 (規制薬物)』、『鎮痛薬症例』が80%台と高く、『多剤症例 (医薬品)』が73.1%とこれに次いでいた。

入院形態別にみると、措置入院は入院患者全体の14.3%、医療保護入院が45.3%、任意入院が39.6%であり、非自発的入院の比率が全体の約60%を占めていた。主たる使用薬物別にみると、措置入院は『覚せい剤症例』、『多剤症例 (規制薬物)』で16～20%と高かった。医療保護入院は、『大麻症例』で83.3%と高く、次いで『多剤症例 (規制薬物)』、『有機溶剤症例』、『覚せい剤症例』で40～60%にみられた。任意入院は、『その他症例』、『抗不安薬症例』、『睡眠薬症例』、『多剤症例 (医薬品)』において70～80%と高かった。

表18 主たる使用薬物別にみた治療開始年齢の分布

	治療開始年齢														計	治療開始平均年齢
	<10	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	55~59	60~64	65≤	不明		
覚せい剤	1 (0.2%)	2 (0.4%)	43 (8.9%)	83 (17.2%)	121 (25.1%)	81 (16.8%)	45 (9.3%)	22 (4.6%)	17 (3.5%)	9 (1.9%)	8 (1.7%)	3 (0.6%)	1 (0.2%)	46 (9.5%)	482 (100.0%)	29.8±9.5
有機溶剤	0	5 (3.0%)	46 (28.0%)	43 (26.2%)	38 (23.2%)	13 (7.9%)	3 (1.8%)	2 (1.2%)	1 (0.6%)	0	0	0	0	13 (7.9%)	164 (100.0%)	22.9±6.1
睡眠薬	0	0	2 (3.4%)	7 (11.9%)	7 (11.9%)	10 (16.9%)	12 (20.3%)	4 (6.8%)	2 (3.4%)	3 (5.1%)	1 (1.7%)	2 (3.4%)	0	9 (15.3%)	59 (100.0%)	34.7±10.7
抗不安薬	0	0	0	2 (11.8%)	6 (35.3%)	4 (23.5%)	2 (11.8%)	0	0	0	0	0	0	3 (17.6%)	17 (100.0%)	28.4±4.7
鎮痛薬	0	0	0	4 (16.7%)	3 (12.5%)	0	2 (8.3%)	3 (12.5%)	4 (16.7%)	3 (12.5%)	1 (4.2%)	1 (4.2%)	1 (4.2%)	2 (8.3%)	24 (100.0%)	40.7±14.0
鎮咳薬	0	0	1 (3.2%)	7 (22.6%)	12 (38.7%)	3 (9.7%)	4 (12.9%)	1 (3.2%)	0	0	0	0	0	3 (9.7%)	31 (100.0%)	27.5±5.7
大麻	0	0	12 (52.2%)	7 (30.4%)	1 (4.3%)	2 (8.7%)	1 (4.3%)	0	0	0	0	0	0	0	23 (100.0%)	21.9±6.5
その他	0	0	0	6 (40.0%)	3 (20.0%)	2 (13.3%)	2 (13.3%)	1 (6.7%)	1 (6.7%)	0	0	0	0	0	15 (100.0%)	29.5±8.1
多剤 (医薬品)	0	0	1 (3.8%)	4 (15.4%)	7 (26.9%)	10 (38.5%)	1 (3.8%)	1 (3.8%)	0	1 (3.8%)	1 (3.8%)	0	0	0	26 (100.0%)	31.0±8.8
多剤 (規制薬物)	0	1 (2.9%)	7 (20.0%)	13 (37.1%)	6 (17.1%)	2 (5.7%)	1 (2.9%)	1 (2.9%)	0	0	0	0	0	4 (11.4%)	35 (100.0%)	23.4±6.0

表19 主たる使用薬物別にみた入院形態

(主たる使用薬物)	入院形態					計	対象 例数	入院患者 の比率	記載 なし
	任意入院	医療保護入院	措置入院	その他					
覚せい剤	81 (30.6%)	122 (46.0%)	59 (22.3%)	3 (1.1%)	265 (100.0%)	453	(58.5%)	29	
有機溶剤	47 (47.5%)	46 (46.5%)	6 (6.1%)	0	99 (100.0%)	149	(66.4%)	15	
睡眠薬	18 (54.5%)	13 (39.4%)	1 (3.0%)	1 (3.0%)	33 (100.0%)	55	(60.0%)	4	
抗不安薬	6 (75.0%)	2 (25.0%)	0	0	8 (100.0%)	14	(57.1%)	3	
鎮痛薬	13 (72.2%)	5 (27.8%)	0	0	18 (100.0%)	21	(85.7%)	3	
鎮咳薬	9 (60.0%)	5 (33.3%)	1 (6.7%)	0	15 (100.0%)	28	(53.6%)	3	
大麻	2 (16.7%)	10 (83.3%)	0	0	12 (100.0%)	22	(54.5%)	1	
その他	4 (66.7%)	2 (33.3%)	0	0	6 (100.0%)	15	(40.0%)	0	
多剤(医薬品)	13 (68.4%)	6 (31.6%)	0	0	19 (100.0%)	26	(73.1%)	0	
多剤(規制薬物)	7 (23.3%)	18 (60.0%)	5 (16.7%)	0	30 (100.0%)	34	(88.2%)	1	
計	200 (24.5%)	229 (28.0%)	72 (8.8%)	4 (0.5%)	505 (100.0%)	817	(100.0%)	59	

20) 薬物初回使用の契機となった人物

(表20-1, 20-2)

薬物使用のきっかけとなった人物として“同性の友人”としたものが、『有機溶剤症例』、『多剤(規制薬物)』で男女とも60~70%前後と最も高い割合を示した。次いで『覚せい剤症例』、『大麻症例』、『鎮咳薬症例』の男性で割合が高かった。また、『覚せい剤症例』、『有機溶剤症例』、『鎮咳薬症例』の女性症例においては、“異性の友人”が30~50%と他の薬物症例群に比較して高い割合を示した。これに対して、『鎮痛薬症例』、『睡眠薬症

例』、『抗不安薬症例』、『多剤症例(医薬品)』などでは、“自発的使用”あるいは“医師”をあげた症例の割合が比較的高かった。なお、『覚せい剤症例』では“密売人”との接触が初回使用のきっかけとなっている症例は男性の8.1%、男女合わせて7.1%にみられた。

21) 薬物の初回使用の動機

(表21-1, 21-2)

『覚せい剤症例』、『有機溶剤症例』、『大麻症例』などの規制薬物を主たる使用薬物とする症例群で

表20-1 薬物初回使用の契機となった人物

(契機となった人物)	主たる使用薬物									
	覚せい剤		有機溶剤		睡眠薬		抗不安薬		鎮痛薬	
	(男)	(女)	(男)	(女)	(男)	(女)	(男)	(女)	(男)	(女)
なし(自発的使用)	21 (5.8%)	3 (2.4%)	11 (8.1%)	3 (10.7%)	11 (36.7%)	10 (34.5%)	2 (22.2%)	2 (25.0%)	3 (25.0%)	5 (41.7%)
配偶者	1 (0.3%)	3 (2.4%)	0	0	0	1 (3.4%)	0	0	1 (8.3%)	0
同棲相手	0	5 (4.1%)	0	0	0	0	0	0	0	1 (8.3%)
恋人・愛人	0	17 (13.8%)	1 (0.7%)	6 (21.4%)	0	0	0	0	0	0
同性の友人	215 (59.9%)	30 (24.4%)	99 (72.8%)	17 (60.7%)	6 (20.0%)	3 (10.3%)	3 (33.3%)	1 (12.5%)	2 (16.7%)	1 (8.3%)
異性の友人	16 (4.5%)	48 (39.0%)	4 (2.9%)	8 (28.6%)	1 (3.3%)	4 (13.8%)	0	1 (12.5%)	0	0
知人	22 (6.1%)	5 (4.1%)	7 (5.1%)	1 (3.6%)	2 (6.7%)	3 (10.3%)	0	0	0	2 (16.7%)
医師	1 (0.3%)	1 (0.8%)	0	0	9 (30.0%)	4 (13.8%)	4 (44.4%)	4 (50.0%)	5 (41.7%)	1 (8.3%)
薬剤師	1 (0.3%)	0	0	0	2 (6.7%)	2 (6.9%)	0	0	1 (8.3%)	2 (16.7%)
親	0	0	1 (0.7%)	0	0	2 (6.9%)	0	0	0	0
同胞	5 (1.4%)	0	1 (0.7%)	0	1 (3.3%)	0	0	0	0	0
密売人	29 (8.1%)	5 (4.1%)	5 (3.7%)	1 (3.6%)	0	0	0	0	0	0
その他	11 (3.1%)	3 (2.4%)	3 (2.2%)	0	0	0	0	0	0	0
症例数	359 (100.0%)	123 (100.0%)	136 (100.0%)	28 (100.0%)	30 (100.0%)	29 (100.0%)	9 (100.0%)	8 (100.0%)	12 (100.0%)	12 (100.0%)

表20-2 薬物初回使用の契機となった人物

(契機となった人物)	主たる使用薬物									
	鎮咳薬		大麻		その他		多剤 (医薬品)		多剤 (規制薬物)	
	(男)	(女)	(男)	(女)	(男)	(女)	(男)	(女)	(男)	(女)
なし(自発的使用)	5 (21.7%)	1 (12.5%)	0	0	1 (8.3%)	1 (33.3%)	6 (33.3%)	2 (25.0%)	5 (19.2%)	1 (11.1%)
配偶者	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
同棲相手	0	0	0	0	1 (8.3%)	0	0	0	1 (3.8%)	1 (11.1%)
恋人・愛人	2 (8.7%)	1 (12.5%)	1 (4.3%)	0	1 (8.3%)	1 (33.3%)	0	1 (12.5%)	0	1 (11.1%)
同性の友人	12 (52.2%)	2 (25.0%)	20 (87.0%)	0	1 (8.3%)	0	5 (27.8%)	0	16 (61.5%)	5 (55.6%)
異性の友人	0	4 (50.0%)	1 (4.3%)	0	0	0	0	1 (12.5%)	1 (3.8%)	2 (22.2%)
知人	1 (4.3%)	0	3 (13.0%)	0	0	1 (33.3%)	0	0	2 (7.7%)	1 (11.1%)
医師	0	0	0	0	5 (41.7%)	0	7 (38.9%)	4 (50.0%)	0	0
薬剤師	1 (4.3%)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
親	0	1 (12.5%)	0	0	0	0	0	0	0	0
同胞	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
密売人	0	0	0	0	1 (8.3%)	0	0	0	4 (15.4%)	1 (11.1%)
その他	0	0	1 (4.3%)	0	0	0	0	0	1 (3.8%)	0
症例数	23 (100.0%)	8 (100.0%)	23 (100.0%)	0 (100.0%)	12 (100.0%)	3 (100.0%)	18 (100.0%)	8 (100.0%)	26 (100.0%)	9 (100.0%)

表21-1 薬物初回使用の動機

(動機)	主たる使用薬物									
	覚せい剤		有機溶剤		睡眠薬		抗不安薬		鎮痛薬	
	(男)	(女)	(男)	(女)	(男)	(女)	(男)	(女)	(男)	(女)
刺激を求めて	106 (29.5%)	26 (21.1%)	46 (33.8%)	5 (17.9%)	3 (10.0%)	2 (6.9%)	0	0	1 (8.3%)	0
好奇心	293 (81.6%)	68 (55.3%)	97 (71.3%)	18 (64.3%)	8 (26.7%)	6 (20.7%)	2 (22.2%)	0	1 (8.3%)	0
自暴自棄になって	25 (7.0%)	9 (7.3%)	5 (3.7%)	1 (3.6%)	3 (10.0%)	0	0	0	0	0
断り切れずに	78 (21.7%)	34 (27.6%)	21 (15.4%)	4 (14.3%)	3 (10.0%)	1 (3.4%)	1 (11.1%)	0	0	0
覚醒効果を求めて	25 (7.0%)	3 (2.4%)	1 (0.7%)	0	1 (3.3%)	0	0	0	0	0
疲労の除去	35 (9.7%)	2 (1.6%)	4 (2.9%)	1 (3.6%)	2 (6.7%)	4 (13.8%)	0	1 (12.5%)	1 (8.3%)	2 (16.7%)
性的効果を求めて	12 (3.3%)	4 (3.3%)	1 (0.7%)	0	1 (3.3%)	0	0	0	0	0
ストレス解消	33 (9.2%)	7 (5.7%)	18 (13.2%)	3 (10.7%)	3 (10.0%)	8 (27.6%)	0	1 (12.5%)	1 (8.3%)	3 (25.0%)
不安の軽減	14 (3.9%)	6 (4.9%)	12 (8.8%)	4 (14.3%)	8 (26.7%)	11 (37.9%)	6 (66.7%)	4 (50.0%)	1 (8.3%)	3 (25.0%)
不眠の軽減	8 (2.2%)	1 (0.8%)	0	1 (3.6%)	16 (53.3%)	14 (48.3%)	0	4 (50.0%)	1 (8.3%)	1 (8.3%)
疼痛の軽減	4 (1.1%)	2 (1.6%)	1 (0.7%)	0	1 (3.3%)	2 (6.9%)	0	0	5 (41.7%)	8 (66.7%)
咳嗽の軽減	0	0	0	0	0	1 (3.4%)	0	0	0	0
その他	64 (17.8%)	19 (15.4%)	10 (7.4%)	4 (14.3%)	3 (10.0%)	4 (13.8%)	1 (11.1%)	1 (12.5%)	1 (8.3%)	0
症例数	359 (100.0%)	123 (100.0%)	136 (100.0%)	28 (100.0%)	30 (100.0%)	29 (100.0%)	9 (100.0%)	8 (100.0%)	12 (100.0%)	12 (100.0%)

表21-2 薬物初回使用の動機

(動機)	主たる使用薬物									
	鎮咳薬		大麻		その他		多剤 (医薬品)		多剤 (規制薬物)	
	(男)	(女)	(男)	(女)	(男)	(女)	(男)	(女)	(男)	(女)
刺激を求めて	8 (34.8%)	2 (25.0%)	10 (43.5%)	0	2 (16.7%)	0	2 (11.1%)	1 (12.5%)	12 (46.2%)	1 (11.1%)
好奇心	11 (47.8%)	3 (37.5%)	20 (87.0%)	0	3 (25.0%)	0	3 (16.7%)	0	20 (76.9%)	4 (44.4%)
自暴自棄になって	0	0	4 (17.4%)	0	1 (8.3%)	0	3 (16.7%)	2 (25.0%)	3 (11.5%)	2 (22.2%)
断り切れずに	6 (26.1%)	2 (25.0%)	4 (17.4%)	0	1 (8.3%)	0	1 (5.6%)	0	3 (11.5%)	2 (22.2%)
覚醒効果を求めて	3 (13.0%)	0	0	0	3 (25.0%)	1 (33.3%)	0	0	0	1 (11.1%)
疲労の除去	0	1 (12.5%)	1 (4.3%)	0	3 (25.0%)	0	1 (5.6%)	0	1 (3.8%)	0
性的効果を求めて	0	0	0	0	0	0	0	0	1 (3.8%)	0
ストレス解消	2 (8.7%)	2 (25.0%)	2 (8.7%)	0	1 (8.3%)	0	1 (5.6%)	0	1 (3.8%)	0
不安の軽減	4 (17.4%)	2 (25.0%)	0	0	3 (25.0%)	1 (33.3%)	5 (27.8%)	4 (50.0%)	2 (7.7%)	2 (22.2%)
不眠の軽減	1 (4.3%)	0	0	0	1 (8.3%)	0	7 (38.9%)	3 (37.5%)	1 (3.8%)	1 (11.1%)
疼痛の軽減	1 (4.3%)	1 (12.5%)	0	0	0	0	1 (5.6%)	3 (37.5%)	1 (3.8%)	0
咳嗽の軽減	1 (4.3%)	1 (12.5%)	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	5 (21.7%)	1 (12.5%)	0	0	3 (25.0%)	2 (66.7%)	3 (16.7%)	1 (12.5%)	3 (11.5%)	3 (33.3%)
症例数	23 (100.0%)	8 (100.0%)	23 (100.0%)	0	12 (100.0%)	3 (100.0%)	18 (100.0%)	8 (100.0%)	26 (100.0%)	9 (100.0%)

表22-1 薬物の入手経路

	主たる使用薬物									
	覚せい剤		有機溶剤		睡眠薬		抗不安薬		鎮痛薬	
	(男)	(女)	(男)	(女)	(男)	(女)	(男)	(女)	(男)	(女)
最近1年間は使用せず	158 (50.8%)	42 (37.2%)	54 (45.4%)	5 (15.2%)	3 (8.1%)	3 (9.4%)	1 (10.0%)	0	0	3 (30.0%)
友人	24 (7.7%)	14 (12.4%)	14 (11.8%)	10 (30.3%)	1 (2.7%)	2 (6.3%)	0	1 (11.1%)	0	0
知人	28 (9.0%)	16 (14.2%)	8 (6.7%)	2 (6.1%)	2 (5.4%)	1 (3.1%)	0	0	0	0
恋人・愛人	2 (0.6%)	16 (14.2%)	0	3 (9.1%)	0	0	0	0	0	0
家族	0	1 (0.9%)	2 (1.7%)	1 (3.0%)	0	0	0	0	0	0
密売人(日本人)	84 (27.0%)	19 (16.8%)	10 (8.4%)	7 (21.2%)	2 (5.4%)	0	0	0	0	0
密売人(外国人)	11 (3.5%)	4 (3.5%)	0	0	0	0	0	0	0	0
医師	0	0	0	0	19 (51.4%)	12 (37.5%)	7 (70.0%)	7 (77.8%)	5 (45.5%)	0
薬局	0	0	0	0	9 (24.3%)	14 (43.8%)	2 (20.0%)	1 (11.1%)	6 (54.5%)	7 (70.0%)
その他	4 (1.3%)	1 (0.9%)	31 (26.1%)	5 (15.2%)	1 (2.7%)	0	0	0	0	0
症例数	311 (100.0%)	113 (100.0%)	119 (100.0%)	33 (100.0%)	37 (100.0%)	32 (100.0%)	10 (100.0%)	9 (100.0%)	11 (100.0%)	10 (100.0%)

(複数回答)

表22-2 薬物の入手経路

	主たる使用薬物									
	鎮咳薬		大麻		その他		多剤 (医薬品)		多剤 (規制薬物)	
	(男)	(女)	(男)	(女)	(男)	(女)	(男)	(女)	(男)	(女)
最近1年間は使用せず	3 (15.0%)	1 (11.1%)	3 (11.5%)	0	1 (9.1%)	0	3 (15.8%)	1 (9.1%)	8 (27.6%)	1 (12.5%)
友人	1 (5.0%)	2 (22.2%)	13 (50.0%)	0	0	0	1 (5.3%)	0	5 (17.2%)	2 (25.0%)
知人	0	0	5 (19.2%)	0	0	0	1 (5.3%)	0	3 (10.3%)	1 (12.5%)
恋人・愛人	0	0	0	0	0	0	0	0	1 (3.4%)	1 (12.5%)
家族	0	0	0	0	0	0	0	1 (9.1%)	0	0
密売人(日本人)	0	0	4 (15.4%)	0	0	0	0	0	5 (17.2%)	1 (12.5%)
密売人(外国人)	0	0	1 (3.8%)	0	0	0	0	0	1 (3.4%)	1 (12.5%)
医師	0	0	0	0	7 (63.6%)	3 (75.0%)	12 (63.2%)	5 (45.5%)	1 (3.4%)	1 (12.5%)
薬局	16 (80.0%)	6 (66.7%)	0	0	1 (9.1%)	1 (25.0%)	2 (10.5%)	3 (27.3%)	2 (6.9%)	0
その他	0 (0.0%)	0	0 (0.0%)	0	2 (18.2%)	0	0	1 (9.1%)	3 (10.3%)	0
症例数	20 (100.0%)	9 (100.0%)	26 (100.0%)	0	11 (100.0%)	4 (100.0%)	19 (100.0%)	11 (100.0%)	29 (100.0%)	8 (100.0%)

(複数回答)

表23 性別にみたICD-10による主診断

	男 性		女 性		計	
【F1x.0】急性中毒	25	(3.9%)	7	(3.1%)	32	(3.7%)
【F1x.1】有害な使用	33	(5.1%)	12	(5.3%)	45	(5.1%)
【F1x.2】依存症候群	149	(23.0%)	86	(37.7%)	235	(26.8%)
【F1x.3】離脱状態	1	(0.2%)	3	(1.3%)	4	(0.5%)
【F1x.4】せん妄離脱状態	4	(0.6%)	1	(0.4%)	5	(0.6%)
【F1x.5】精神病性障害(<6M)	109	(16.8%)	25	(11.0%)	134	(15.3%)
【F1x.57】精神病性障害(>6M)	135	(20.8%)	25	(11.0%)	160	(18.3%)
【F1x.6】健忘症候群	1	(0.2%)		(0.0%)	1	(0.1%)
【F1x.7】残遺・遅発性障害	167	(25.8%)	57	(25.0%)	224	(25.6%)
【F1x.8】その他 (記載なし)	15	(2.3%)	8	(3.5%)	23	(2.6%)
計	648	(100.0%)	228	(100.0%)	876	(100.0%)

は、“好奇心”や“刺激を求めて”の割合が高く、『鎮咳薬症例』でも比較的高い割合を示した。これらは男性症例でより目立った。同時に、『覚せい剤症例』や『鎮咳薬症例』では1/4程度が“断り切れずに”を選択していた。また、『覚せい剤症例』群における“性的効果を求めて”の男女差はなかった。『睡眠薬症例』、『抗不安薬症例』、『鎮痛薬症例』等の処方薬・医薬品使用の症例群では、40～70%が“不眠の軽減”，“不安の軽減”，“疼痛の軽減”など、本来の症状の軽快を目的としたものであったが、これに対して『鎮咳薬』では“咳嗽の軽減”を目的として薬物使用を開始した割合は全体で6.5%と低かった。

2 2) 最近1年間における薬物の主な入手経路 (表22-1, 22-2)

最近1年以内に使用歴のない割合は、『覚せい剤症例』の男性で50.8%と最も高く、次いで『有機溶剤症例』の男性で45.4%と高かった。

入手経路としては、『覚せい剤症例』では20～30%が“密売人”で、『有機溶剤症例』の女性、『多剤症例(規制薬物)』でも高い割合を示した。『大麻症例』では“友人”が50%を占め、『覚せい剤症例』、『有機溶剤症例』でも“友人・知人”の割合が20～30%前後と比較的高く、女性でやや高い傾向がみられた。また『覚せい剤症例』の女性では、“恋人・愛人”が14.2%と高いのが目立った。一

方、『睡眠薬症例』、『抗不安薬症例』、『鎮痛薬症例』および『多剤症例(医薬品)』ではほとんどが“医師”または“薬局”からの入手であった。とくに『鎮痛薬症例』、『鎮咳薬症例』では市販の医薬品を使用している割合が高いことがうかがわれた。

2 3) 性別にみたICD-10による主診断(表23)

全体として“【F1x.2】依存症候群”と“【F1x.7】残遺性障害および遅発性精神病性障害”の割合が高く、それぞれ約1/4を占めていた。精神病症状の持続が6ヵ月以内である“【F1x.5】精神病性障害(<6M)”は15.3%であった。今回ICD-10に追加した項目である、精神病性障害が6ヶ月以上に及ぶ“【F1x.57】精神病性障害(>6M)”は18.3%にみられた。両者を合わせると“精神病性障害”としては全体の約1/3を占め、最も高い割合を示した。

性別にみると、“【F1x.2】依存症候群”は女性においてより高い割合を示し、主診断あるいは副診断いずれかで“依存症候群”を満たす症例の割合は男性288例(男性症例の44.4%)、女性126例(女性症例の55.3%)と、女性の方が高い割合を示した。一方、精神病性障害は男性に高い傾向がみられ、とくに精神病性障害が6ヶ月以上持続している割合は男性で高かった。

表24 主たる使用薬物別にみたICD-10による主診断

	[F1x.0]	[F1x.1]	[F1x.2]	[F1x.3]	[F1x.4]	[F1x.5]	[F1x.57]	[F1x.6]	[F1x.7]	[F1x.8]	不明	合計
	急性中毒	有害な使用	依存症候群	離脱状態	せん妄を伴う離脱状態	精神病性障害 (<6M)	精神病性障害 (>6M)	健忘症候群	残遺性障害および遅発性精神病性障害	他の精神および行動の障害		
覚せい剤	11 (2.3%)	11 (2.3%)	64 (13.4%)			96 (20.1%)	120 (25.1%)	1 (0.2%)	168 (35.1%)	7 (1.5%)	3	481 (100.6%)
有機溶剤	5 (3.1%)	19 (11.9%)	51 (31.9%)	2 (1.3%)		25 (5.6%)	23 (4.4%)		31 (19.4%)	4 (2.5%)	3	163 (101.9%)
睡眠薬	3 (5.2%)	3 (5.2%)	39 (67.2%)	2 (3.4%)	4 (6.9%)	2 (3.4%)	1 (1.7%)		2 (3.4%)	2 (3.4%)	1	59 (101.7%)
抗不安薬		2 (11.8%)	13 (76.5%)						1 (5.9%)	1 (5.9%)		17 (100.0%)
鎮痛薬	1 (4.2%)	5 (20.8%)	13 (54.2%)		1 (4.2%)				1 (4.2%)	3 (12.5%)		24 (100.0%)
鎮咳薬			17 (58.6%)			2 (6.9%)	2 (6.9%)		6 (20.7%)	2 (6.9%)	2	31 (106.9%)
大麻	7 (31.8%)	2 (9.1%)	1 (4.5%)			5 (22.7%)	2 (9.1%)		5 (22.7%)			22 (100.0%)
その他	1 (6.7%)	1 (6.7%)	11 (73.3%)				1 (6.7%)			1 (6.7%)		15 (100.0%)
多剤(規制薬物)	2 (6.5%)	1 (3.2%)	7 (22.6%)			4 (12.9%)	9 (29.0%)		6 (19.4%)	2 (6.5%)	3	34 (109.7%)
多剤(医薬品)	2 (8.3%)	1 (4.2%)	19 (79.2%)						1 (4.2%)	1 (4.2%)	1	25 (104.2%)
不明							2 (40.0%)		3 (60.0%)			5 (100.0%)
合計	32 (3.7%)	45 (5.1%)	235 (26.8%)	4 (0.5%)	5 (0.6%)	134 (15.3%)	160 (18.3%)	1 (0.1%)	224 (25.6%)	23 (2.6%)	13 (1.5%)	876 (100.0%)

24) 主たる使用薬物別にみた主診断 (表24)

ICD-10による主診断を主たる使用薬物別にみると、“【F1x.0】急性中毒”は『大麻症例』で31.8%，“【F1x.1】有害な使用”は『鎮痛薬症例』で20.8%と高いのが目立った。“【F1x.2】依存症候群”の割合は『睡眠薬症例』、『抗不安薬症例』、『多剤症例(医薬品)』などで70%前後と高く、『鎮痛薬症例』、『鎮咳薬症例』でも50~60%にみられた。一方、『覚せい剤症例』では13.4%、『有機溶剤症例』では31.9%と比較的低かった。

“精神病性障害”は全体の約1/3と最も高い割合であった。『覚せい剤症例』では約45%が“精神病性障害”を示し、6ヶ月以上にわたって症状が持続する群が約1/4にみられた。この割合は『多剤症例(規制薬物)』で29.0%と最も高く、症例全体では18.3%を占めていた。“【F1x.7】残遺性障害および遅発性精神病性障害”の割合は25.6%と症例全体の約1/4を占め、“【F1x.2】依存症候群”の26.8%に次いで高い割合を示した。“【F1x.57】精神病性障害(>6M)”と“【F1x.7】残遺性障害および遅発性精神病性障害”を合わせると43.9%と半数近くに及び、症状の長期化がうかがわれた。

25) “依存症候群”の下位項目

(表25-1, -2, -3)

主たる使用薬物別に、主診断あるいは副診断で

ICD-10の“【F1x.2】依存症候群”に該当する患者について、下位6項目のいずれに該当するかを表25-1および25-2で示した。

“①物質使用への強い欲望あるいは強迫感”および“②コントロール困難”については、ほとんどの薬物で高い割合を示し、とくに『睡眠薬症例』、『抗不安薬症例』、『鎮咳薬症例』などで目立った。“③生理的離脱の存在”，“④耐性の存在”については、『睡眠薬症例』、『抗不安薬症例』、『鎮痛薬症例』、『鎮咳薬症例』などで比較的高い割合を示した。

26) 性別にみた“依存症候群”下位項目 (表26)

ICD-10“依存症候群”の下位項目に該当した症例について、下位6項目のそれぞれに該当した割合と、該当した項目数の平均を男女別に示す。対象とした症例は、記載のあった症例458例で、男性が314例(68.6%)、女性が144例(31.4%)であった。

該当した下位項目としては、“①物質使用への強い欲望あるいは強迫感”および“②コントロール困難”の割合が男女とも高く、50~70%前後を占めていた。6項目すべてについて、女性の方が該当する割合が有意に高かった(p<.01, χ^2 検定)。該当する項目数の平均は、男性が2.9項目、女性

表25-1 主たる使用薬物別にみたICD-10“依存症候群”の下位項目

("依存症候群"の下位項目)	主たる使用薬物				
	覚せい剤	有機溶剤	睡眠薬	抗不安薬	鎮痛薬
①物質使用への強い欲望あるいは強迫感	116 (53.7%)	50 (58.8%)	38 (77.6%)	10 (76.9%)	14 (87.5%)
②コントロール困難	95 (44.0%)	56 (65.9%)	46 (93.9%)	10 (76.9%)	10 (62.5%)
③生理的離脱状態の存在	33 (15.3%)	18 (21.2%)	24 (49.0%)	6 (46.2%)	7 (43.8%)
④耐性の存在	32 (14.8%)	16 (18.8%)	31 (63.3%)	8 (61.5%)	6 (37.5%)
⑤摂取時間や回復に要する時間の延長	44 (20.4%)	28 (32.9%)	21 (42.9%)	5 (38.5%)	1 (6.3%)
⑥有害な結果にかかわらず物質使用を継続	83 (38.4%)	38 (44.7%)	27 (55.1%)	7 (53.8%)	7 (43.8%)
該当するが①～⑥の存在は不明	54 (25.0%)	20 (23.5%)			
“依存症候群”の既往のある症例	216 (100.0%)	85 (100.0%)	49 (100.0%)	13 (100.0%)	16 (100.0%)
各薬物症例群に占める上記の割合	44.8%	51.8%	83.1%	76.5%	66.7%

表25-2 主たる使用薬物別にみたICD-10“依存症候群”の下位項目

("依存症候群"の下位項目)	主たる使用薬物				
	鎮咳薬	大麻	その他	多剤(規制薬物多剤(医薬品))	
①物質使用への強い欲望あるいは強迫感	21 (95.5%)	4 (57.1%)	9 (75.0%)	9 (40.9%)	13 (81.3%)
②コントロール困難	21 (95.5%)	2 (28.6%)	9 (75.0%)	8 (36.4%)	14 (87.5%)
③生理的離脱状態の存在	14 (63.6%)	1 (14.3%)	5 (41.7%)	4 (18.2%)	10 (62.5%)
④耐性の存在	12 (54.5%)		6 (50.0%)	3 (13.6%)	9 (56.3%)
⑤摂取時間や回復に要する時間の延長	14 (63.6%)	1 (14.3%)	2 (16.7%)	4 (18.2%)	6 (37.5%)
⑥有害な結果にかかわらず物質使用を継続	17 (77.3%)	3 (42.9%)	7 (58.3%)	7 (31.8%)	12 (75.0%)
該当するが①～⑥の存在は不明		1 (14.3%)	1 (8.3%)	1 (4.5%)	5 (31.3%)
“依存症候群”の既往のある症例	22 (100.0%)	7 (100.0%)	12 (100.0%)	22 (100.0%)	16 (100.0%)
各薬物症例群に占める上記の割合	71.0%	30.4%	80.0%	62.9%	61.5%

が3.4項目で、女性の方が有意に多かった ($p < .05$, Mann-Whitney 検定)。

27) 乱用開始から依存症候群に至るまでの期間 (表27)

薬物乱用開始から依存症候群に至るまでの期間 (LOTAD) について、主たる使用薬物別にみた平均期間 (月) を示す。症例全体の結果としては、0～288ヵ月で平均31.8ヵ月 (2.7年) であった。多くの薬物において、女性の方においてLOTADがより短縮しているようではあるが、数値のばらつきが大きく、統計的に明らかではなかった。

28) 薬物別にみたSDS得点 (表28)

本質問項目の対象となる「最近1年以内に薬物使用歴のある患者」数、各薬物群における割合 (%), 依存症重症度に関する自記式評価尺度 (SDS得点) の結果を示す。ここではSDS5項目についてのみ平均とした (0～15点)。

全体として35.8%が該当し、平均7.3点であった。SDS得点が最も高かったのは『抗不安薬症例』および『鎮咳薬症例』で10.7点、次いで『その他症例』9.1点、『多剤症例 (医薬品)』8.4点、『睡眠薬症例』8.3点で、『覚せい剤症例』は6.9点、『有機溶剤症例』は7.1点であった。『大麻症例』は2.6点と最も低かった。統計的には各薬物間で得点

表26 性別にみた“依存症候群”下位項目

	男 性		女 性		計	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
("依存症候群"の下位項目)						
①物質使用への強い欲望あるいは強迫感	184	(58.6%)	101	(70.1%)	285	(62.2%)
②コントロール困難	171	(54.5%)	101	(70.1%)	272	(59.4%)
③生理的離脱状態の存在	75	(23.9%)	47	(32.6%)	122	(26.6%)
④耐性の存在	73	(23.2%)	50	(34.7%)	123	(26.9%)
⑤摂取時間や回復に要する時間の延長	75	(23.9%)	51	(35.4%)	126	(27.5%)
⑥有害な結果にかかわらず物質使用を継続	126	(40.1%)	82	(56.9%)	208	(45.4%)
該当するが①～⑥の存在は不明	67	(21.3%)	15	(10.4%)	82	(17.9%)
下位項目に該当した性別症例数	314	(100.0%)	144	(100.0%)	458	(100.0%)
下位項目平均該当数(0～6)	2.9±1.6		3.4±1.7		3.1±1.7	

(複数回答)

表27 乱用開始～依存症候群までの期間(M)

範囲	性別平均期間		計	
	男 性	女 性		
(主たる使用薬物)				
覚せい剤	0～204	29.8±41.4	23.3±27.9	27.8±37.8
有機溶剤	1～288	42.1±56.7	28.3±32.3	39.4±52.7
睡眠薬	1～108	18.4±18.7	34.9±33.2	26.9±28.0
抗不安薬	1～204	72.8±87.8	36.0±12.0	59.0±69.3
鎮痛薬	1～216	5.0±6.1	114.0±105.1	59.5±89.4
鎮咳薬	6～180	37.8±47.5	14.4±12.4	30.9±41.4
大 麻	12～48	28.8±13.7	—	28.8±13.7
全 体	0～288	33.5±47.0	27.8±35.2	31.8±43.7

表28 薬物別にみたSDS得点

主たる使用薬物	該当症例数	各薬物症例群に占める割合(%)	SDS平均得点
覚せい剤	140	29.0%	6.9±3.5
有機溶剤	58	35.4%	7.1±3.2
睡眠薬	25	42.4%	8.3±3.9
抗不安薬	6	35.3%	10.7±3.4
鎮痛薬	11	45.8%	7.8±2.9
鎮咳薬	19	61.3%	10.7±2.5
大 麻	16	69.6%	2.6±2.6
その他	9	60.0%	9.1±1.6
多剤(規制薬物)	17	48.6%	7.5±3.6
多剤(医薬品)	13	50.0%	8.4±3.5
全 体	314	35.8%	7.3±3.6

表29 薬物使用に直接起因しない精神科的障害

	男性		女性		計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
気分障害	56	(8.6%)	28	(12.3%)	84	(9.6%)
不安障害・神経症性障害	69	(10.6%)	44	(19.3%)	113	(12.9%)
ストレス反応・適応障害	39	(6.0%)	26	(11.4%)	65	(7.4%)
身体表現性障害	6	(0.9%)	11	(4.8%)	17	(1.9%)
摂食障害	8	(1.2%)	33	(14.5%)	41	(4.7%)
多動性障害	4	(0.6%)	0	(0.0%)	4	(0.5%)
行為障害	22	(3.4%)	7	(3.1%)	29	(3.3%)

表30 生活史上の体験

	男性		女性		計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
被虐待体験あり	7	(1.1%)	28	(12.3%)	35	(4.0%)
性的虐待体験	0	(0.0%)	4	(1.8%)	4	(0.5%)
近親者によるもの	0	(0.0%)	1	(0.4%)	1	(0.1%)
非近親者によるもの	0	(0.0%)	3	(1.3%)	3	(0.3%)
身体的虐待体験	2	(0.3%)	5	(2.2%)	7	(0.8%)
近親者によるもの	2	(0.3%)	5	(2.2%)	7	(0.8%)
非近親者によるもの	0	(0.0%)	0	(0.0%)	0	(0.0%)
被イジメ体験あり	10	(1.5%)	26	(11.4%)	36	(4.1%)

表31-1 これまでに利用した治療プログラム

	薬物療法	個人精神療法	芸術療法	作業療法	行動療法	内観療法
覚せい剤	448 (92.9%)	413 (85.7%)	4 (0.8%)	119 (24.7%)	10 (2.1%)	9 (1.9%)
有機溶剤	138 (84.1%)	145 (88.4%)	4 (2.4%)	62 (37.8%)	3 (1.8%)	8 (4.9%)
睡眠薬	51 (86.4%)	54 (91.5%)	1 (1.7%)	17 (28.8%)	1 (1.7%)	1 (1.7%)
抗不安薬	15 (88.2%)	14 (82.4%)		4 (23.5%)		
鎮痛薬	17 (70.8%)	17 (70.8%)		7 (29.2%)		1 (4.2%)
鎮咳薬	30 (96.8%)	30 (96.8%)	1 (3.2%)	10 (32.3%)	2 (6.5%)	4 (12.9%)
大麻	12 (52.2%)	21 (91.3%)		6 (26.1%)		
その他	12 (80.0%)	12 (80.0%)		1 (6.7%)	1 (6.7%)	
多剤(規制薬物)	29 (82.9%)	32 (91.4%)		13 (37.1%)	2 (5.7%)	8 (22.9%)
多剤(医薬品)	21 (80.8%)	24 (92.3%)		4 (15.4%)	2 (7.7%)	
(不明)	5	4		1		
計	778 (88.8%)	766 (87.4%)	10 (1.1%)	244 (27.9%)	21 (2.4%)	31 (3.5%)

に差があり ($p < .01$, ANOVA), 『大麻症例』は『鎮痛薬症例』を除くすべての薬物群との間で平均得点に有意差がみられた。また『覚せい剤症例』と『鎮咳薬症例』の間で有意差がみられた ($p < .01$, Scheffeの多重比較)。

29) 他の精神医学的障害 (表29)

薬物使用に直接起因しないと考えられる他の精神医学的障害の併存率について男女別に示す。全体としては“不安障害・神経症性障害”の割合が

12.9%と最も高く、“気分障害”が9.6%でこれに次いでいた。“不安障害・神経症性障害”, “ストレス反応・適応障害”*), “身体表現性障害”, “摂食障害”では女性において有意に割合が高かった ($p < .01$, χ^2 検定)。

30) 生活史上の体験 (表30)

薬物使用に関係すると考えられる生活史上の体験について男女別に示す。“被虐待体験”は全体で4.0%にみられ、女性で12.3%と、男性の1.1%に

表31-2 これまでに利用した治療プログラム

	集団精神療法	運動療法	家族療法	家族会・家族教室(院内・院外)	自助グループ(AA・NA等)への参加	ダルクミーティングへの参加
覚せい剤	94 (19.5%)	50 (10.4%)	12 (2.5%)	11 (2.3%)	41 (8.5%)	21 (4.4%)
有機溶剤	69 (42.1%)	28 (17.1%)	17 (10.4%)	6 (3.7%)	29 (17.7%)	17 (10.4%)
睡眠薬	26 (44.1%)	2 (3.4%)	5 (8.5%)	2 (3.4%)	17 (28.8%)	3 (5.1%)
抗不安薬	5 (29.4%)	1 (5.9%)	1 (5.9%)	2 (11.8%)	4 (23.5%)	1 (5.9%)
鎮痛薬	10 (41.7%)	2 (8.3%)	2 (8.3%)		10 (41.7%)	2 (8.3%)
鎮咳薬	13 (41.9%)	6 (19.4%)	1 (3.2%)	4 (12.9%)	14 (45.2%)	4 (12.9%)
大麻	9 (39.1%)	2 (8.7%)	1 (4.3%)			
その他	6 (40.0%)		1 (6.7%)	1 (6.7%)	4 (26.7%)	2 (13.3%)
多剤(規制薬物)	17 (48.6%)	10 (28.6%)	2 (5.7%)	2 (5.7%)	7 (20.0%)	3 (8.6%)
多剤(医薬品)	12 (46.2%)		5 (19.2%)	3 (11.5%)	10 (38.5%)	1 (3.8%)
(不明)						
計	261 (29.8%)	101 (11.5%)	47 (5.4%)	31 (3.5%)	136 (15.5%)	54 (6.2%)

表32-1 性別にみた治療プログラムの利用状況

	薬物療法	個人精神療法	芸術療法	作業療法	行動療法	内観療法
男性	575 (88.7%)	566 (87.3%)	3 (0.5%)	183 (28.2%)	15 (2.3%)	28 (4.3%)
女性	203 (89.0%)	200 (87.7%)	7 (3.1%)	61 (26.8%)	6 (2.6%)	3 (1.3%)
計	778 (88.8%)	766 (87.4%)	10 (1.1%)	244 (27.9%)	21 (2.4%)	31 (3.5%)

表32-2 性別にみた治療プログラムの利用状況

	集団精神療法	家族療法	運動療法	家族会・家族教室(院内・院外)	自助グループ(AA・NA等)への参加	ダルクミーティングへの参加
男性	188 (29.0%)	23 (3.5%)	85 (13.1%)	14 (2.2%)	82 (12.7%)	33 (5.1%)
女性	73 (32.0%)	24 (10.5%)	16 (7.0%)	17 (7.5%)	54 (23.7%)	21 (9.2%)
計	261 (29.8%)	47 (5.4%)	101 (11.5%)	31 (3.5%)	136 (15.5%)	54 (6.2%)

比して有意に高い割合であった($p < .01$, χ^2 検定)。また、“被イジメ体験”も女性で11.4%と男性に比して有意に高い割合を示した($p < .01$, χ^2 検定)。

3 1) 主たる使用薬物別にみた治療プログラム

(表3 1-1, 3 1-2)

これまでに利用したことのある各種治療プログラムについては、“薬物療法”、“個人精神療法”などの個人療法的治療はほとんどの症例で用いられていた。“集団精神療法”は、『多剤症例(規制薬物)』、『多剤症例(医薬品)』、『睡眠薬症例』など比較的多くの薬物症例群で40~50%程度の利

用率がみられたが、全体として集団療法的な治療プログラムの利用率は低かった。『鎮咳薬症例』、『鎮痛薬症例』など医薬品の症例群では、“自助グループ”、“家族会・家族教室”の利用率が比較的高い割合を示した。

3 2) 性別にみた治療プログラム

(表3 2-1, 3 2-2)

これまで利用したことのある治療プログラムを性別にみると、個人療法的な治療プログラムでは“芸術療法”で、集団療法的なプログラムでは“家族療法”、“家族会・家族教室”、“自助グループ”、“DARCミーティング”において、女性の方が有

表33 精神疾患の家族歴

主たる使用薬物	精神疾患の家族歴を有する症例数	各薬物群に占める割合(%)
覚せい剤	86	(17.8%)
有機溶剤	32	(19.5%)
睡眠薬	7	(11.9%)
抗不安薬	2	(11.8%)
鎮痛薬	3	(12.5%)
鎮咳薬	6	(19.4%)
大麻	1	(4.3%)
その他	3	(20.0%)
多剤(医薬品)	9	(25.7%)
多剤(規制薬物)	5	(19.2%)
計	154	(17.6%)

表34 各薬物の使用歴を有する症例の推移

	使用歴を有する症例数(%)							
	1996年度		1998年度		2000年度		2002年度	
覚せい剤	565	(62.5%)	555	(59.2%)	660	(67.3%)	580	(66.2%)
有機溶剤	458	(50.7%)	445	(47.5%)	428	(43.6%)	439	(50.1%)
睡眠薬	174	(19.2%)	172	(18.4%)	162	(16.5%)	178	(20.3%)
抗不安薬	93	(10.3%)	101	(10.8%)	94	(9.6%)	115	(13.1%)
鎮痛薬	88	(9.7%)	88	(9.4%)	76	(7.7%)	78	(8.9%)
鎮咳薬	64	(7.1%)	70	(7.5%)	44	(4.5%)	66	(7.5%)
大麻	104	(11.5%)	107	(11.4%)	96	(9.8%)	193	(22.0%)
コカイン	33	(3.7%)	41	(4.4%)	35	(3.6%)	60	(6.8%)
ヘロイン	7	(0.8%)	16	(1.7%)	13	(1.3%)	24	(2.7%)
全症例数	904	(100.0%)	937	(100.0%)	981	(100.0%)	876	(100.0%)

(複数回答)

意に高い利用率を示した (χ^2 検定)。

3 3) 精神疾患の家族歴 (表 3 4)

薬物別にみた“精神疾患の家族歴”は、症例全体の17.6%であった。主たる使用薬物間では統計的に差はみられなかった。男女別では、男性106例(男性症例全体の16.4%)、女性48例(同21.1%)で、有意な差はみられなかった。具体的な精神疾患としては、「薬物関連精神疾患」が25例、「アルコール関連障害」が18例、「統合失調症」が9例などであった。

D. 考察

1) 本年度の実態調査の概括

今回の調査対象施設は1,645施設で、回答を得た施設数は866施設、回答率は52.6%であった。全数調査としては概ね満足できる回答率といえよう。回答率を医療施設の種別でみると、国立病院・療養所が63.3%と最も高く、そのほかの施設においても50%前後の回答率が得られ、施設種別で大きなばらつきはみられなかった。全体としては、対象施設の過半数の回答率を得ることができ、疫